

TORCH

鐙  
炬  
火

知進

落

Handwritten notes in the top left corner.



Olympiad  
Angeles  
1932

天竺の白圖の  
天竺の白圖の  
天竺の白圖の

田代十

唐津又夫

Handwritten notes at the bottom left, including a large bracket-like symbol.

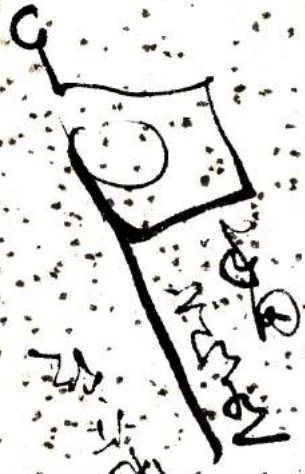
Handwritten notes at the bottom center.

Handwritten notes at the bottom right.



會

立心以事



田社

月子身

沿岸俳句大會

會

外川あす

林

田

盛

社







# 火 炬

ア  
ゴ  
ス  
ト  
社  
編



オリンピック大会始まる

火天海風

アメリカから来た

開ソコ

鎌倉 井原水



同人自選句抄

アゴスト同人……………六九

故人遺什……………一七三

卷末に……………一八四

カ 炬火……………宮城與徳

ツ 太陽に祈る……………上山平八

ト 草萌……………岡草志

沿岸俳句大會句抄

贈  
口玉

松岡其君宛  
様

一九七〇・七月五日

外川明







府 羅

---

築	岡	唐	鈴	岡	半	佐
瀬	草	津	木	村	田	藤
紫	志	文	荷	眸	節	一
粟		夫	聲	子	遊	水
子				鳥		
	高	渡	戸	羽	佐	關
	山	邊	川	田	藤	谷
	泥	虎	あ	馬	知	蓬
	草	次	き	門	星	朗
		郎	ら			



佐藤 一水

オリンピックク

日章旗あがる瞬間のどよめきに涙あふるる

鎗 投

穂尖せんせんと蒼空を描きゆく虹

出 帆

のこるティプも切れてしまつた母と子です

半田 節遊

天幕のカバーを下ろす蟋蟀啼きやんだ山冷へ



コロンの下葉黄ばんでゐるトリテヤ焼く匂ひ

岡村 眸子鳥

死人が殖えると萋の花もう實となつてゐる

五仙ばかりの畑のもの摘みに出る父

鈴木 荷聲

手のひらに感じる吾兒の寢息

土いぢりする兒を笑顔で見守る

ひでりの蟻がつづく朽株からつづく

學校のペンキがはげてる晴着

旅の初夜の寝つけぬ騒音

まともに話せないあとは煙草をふかして

唐津文夫

菫の花くるる厨の物音

考へ直してゐる炎天南瓜は花盛り

佳い月の蟲に又左様ならする

愛嬌たつぷりに見るでもない関の聲買つて了つた

蛇だ蛇だ裸ん坊の兒達



うちの初なりトマトで臍出して坊やもたべてゐる  
ふらついて酔っぱらい達の射的です夏夜

岡 草 志

石の配置やなども秋の土のにほひの中にある

女二人で棲んでゐた秋口の家が移つていつた

離れた心で灯取蟲を見てゐる

とぼしい懷でさらさらと黍の風青し

朝はつれなく萎れてておしろいの花

兄だけに見て來てゐる競技の話が賑はふ

築瀬紫葉子

いろんな人いろんな心が團欒となつてゐる

のんびりと育つ子のかげに淋しく老ゆる親

關 谷 蓬 朗

ルンペン秋も近づいた朝夕のコスモス

山の上まで家は建てられ朝霧の槌音

雑草枯れ月夜へ蟲啼く秋めいてきた

草は枯れてカクタスの刺はするどく映へ

佐藤知星

野風呂で月を抱いてゐる

瘦せた手を握つたこれが御別れとや

風のたつ葉からあらはれる木蓮の花

初兒抱く父となり兒の抱きざま

夏の日盛り池の水濁りて動かず

吾ら寄る人数に西瓜割られて赤し

濱に来て夜も海べのひと夜さふた夜さ

岩に岸に涼しく夏の波よせてくる

羽田馬門

夏の風を切つて短いスカート

戸川あきら

酷暑に句もない筒ぬけの蒼空

渡邊虎次郎

日の丸を心に物色しながらエスマンと言ふ俺

高山泥草

あの人この人墓標となり夏草



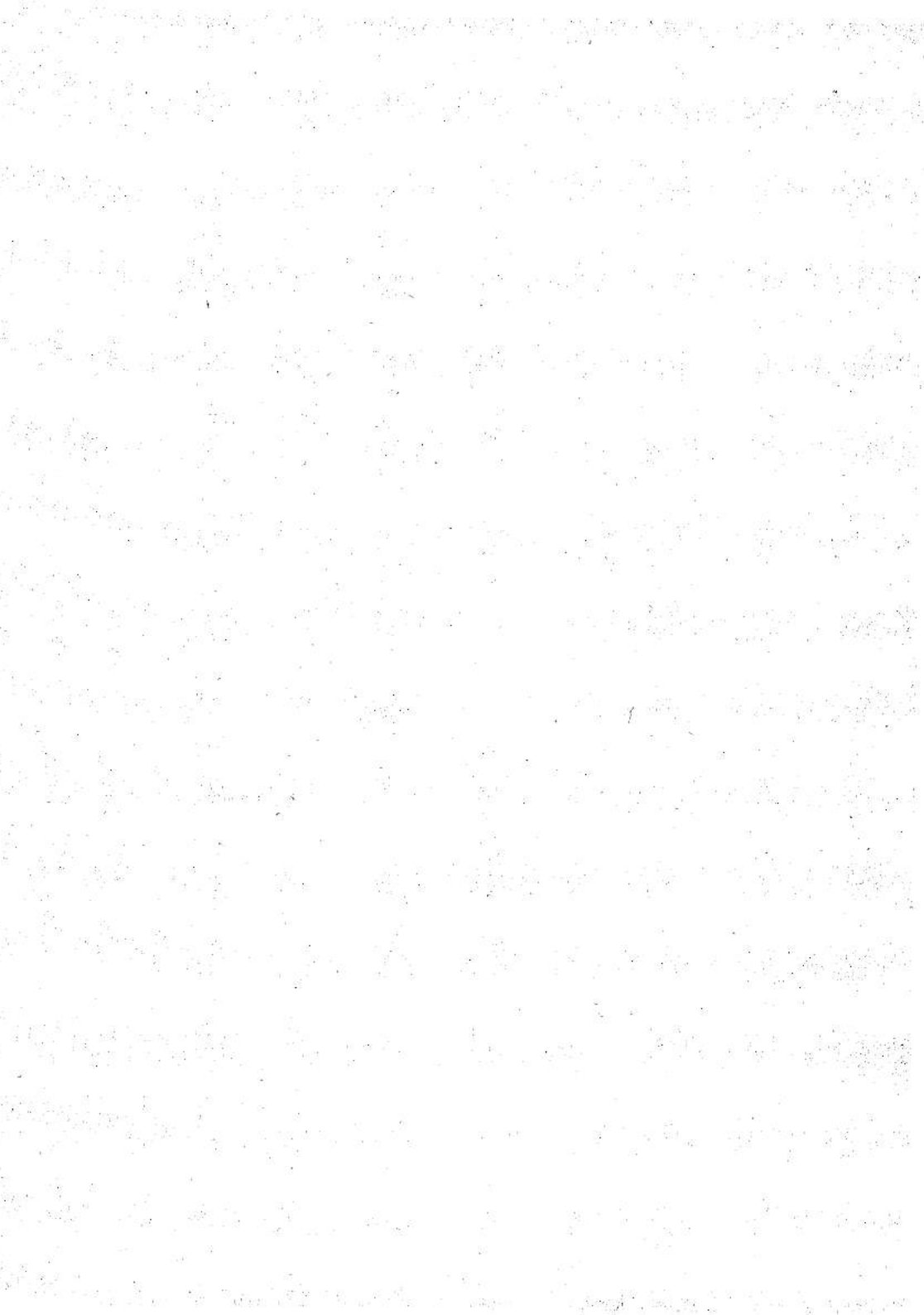
オールドミツシヨン

日曜の鐘澄み青鳶の寺庭となり

オリンピック所見

勝たねばならぬ肉弾競へ炎天

日の丸を仰いだ満足に歸ります



沿岸各地

---

佐	府	城	下
瀬	川	し	山
曉	眞	げ	逸
	砂	る	蒼
	夫		
永	松	隅	五
山	田	田	明
燁	碧	麗	玲
子	沙	紫	子
	明		



桑港 下山 逸 蒼

夜汽車のおもむき味ひゆれゆく

闇は車窓へ灯の美しさのみ見せてゐる

夜汽車で貰つた梨むくその皮

車窓からかけたことあるベンチが見え消え

冷えてくる夜更の膝だいて車席に揺れてる

この體驗味つて夜汽車の膝だく

夜汽車の席の枕落ちむざんな黒髪

汽車の深夜にぱつちり醒めた睫毛の反りやう

くんで寝てゐる手の指輪の珠へ灯

夜汽車の車席で寝ずに來た剃りあとざらめく

スタンドの炎天へ繪日傘咲き競ふてゐる



炎天へ燃え熾かる彼の炬火のいろ

レリス合圖のピストルを天へ向けた刹那

一泊の枕の下でワツチのちくたく

深夜ミシンの騒音を絶やして蟲澄む

五大洲へ別かれ散る握手の手の熱

ふと醒めペンシル走らせば遙かな曉雞

朝霧海を埋めつくし枯穂草のそよぎ

たつた一人のバジヤマ姿を佇たせてこの海

桑港城 しげる

空も地もない霧の中の音

祭の色あせてゆく街の紙散る

桑港府川眞砂夫

如何に働けとやうれぬ梨が地をたたく

遠く来てよい磯草のにほひととまる

オレンヂころころ立つても歩るけない子で

帝國平原 佐瀬 曉

日の丸吸ひ込む青空空の深さ

飛躍の絶頂で八千萬を擔つた顔だ

フレスノ 五 明 玲 子

話しつつ野八ツ手の實は淋しいもの野を風ふき

晝深く語ることば蘭はひそかに花つけてゐる

はげしく赤子泣き乾いた土に黄な花咲いてゐる

土用ぐもり茄子畑蟲づきくらしてゐる

フレスノ 隅 田 麗 紫

藻の匂ひがして崖の断面黄な花

谷のいづ方も青く住みふりし一つ家

たつぷり打水して雞に餌をやりました

フレスノ 松 田 碧 沙 明

ヨセミテに遊びて

瀧の飛沫に芽ぶきをりこの木あの木

巨巖尖り立ち夕べの赤い日様

スタクトン 永山燁子

木のない丘づくに谷間の緑しげり

ふもとは夏草ひろびろ牛の一群

葦なびく川面に三日月ありて

イッハ

---

河	佐	末	平	丸
重	藤	谷	田	山
夏	三	白	鳳	素
月	雄	光	村	仁

松	福	三	見
本	山	田	田
青	溪	翠	宙
味	水	山	夢





丸山素仁

夏の何か賣りさうな家が出来て海の色

草が海を見えなくしてまだまだ伸びる

草に橋かかり釣つてゐる子とその影

失業して青い空へ釣つてゐる

こんなに草が深くて暮れて川音してゐる

たまさか荷汽車が來たりして草になつた畑

影のやうの景氣がついて製糖所の煙突

遠い空で鳥が鳴く窓の蔓草

蜂が花からとんでいつて青い空

平田鳳村

垣外は仙人掌の牛が仔を連れて來てゐる

賣れない鳳梨ならばアスファルトは暮れた  
子の寢息安けし思ふまい思ふまい

鳳梨熟れ腐るままの晝月へ誰もゐやしない

木の芽あかるく子を遊ばせてゐる

鳳梨シーズンの母も出て連れだちて来て日傘

犬の飯が干てゐる雀の庭はく

末谷 白光

やぶれた芋の葉ではれるでもない窓

雨日は茶柱が立つたりすることのめうとでゐる

屋根ばかり木ばかりの月で出てゐた

電線の太いのやこまかいのやの青空のペープレメント

よひどれよひどれと行く街角のネオンサイン

芽ぶく空へ芽ぶく山がころがつてゐる

佐藤 三雄

思ひ出しては吹くやうな風で夕空の梢

車で書いた字の讀みにくく蟲は啼いてゐる

河重 夏月

控へ室のひる近くなる樹は夏

日曜のここらには樹が影してゐるだけ

はかばかしくない病人へ灯して雨が降ります

病後のスリッパはいて垣木槿は咲いてゐる

ひげ剃ることも朝の青い山が眼の前

ながいメケーションとなつた學校が山の根

右に左に月あれば甘蔗ふかれてゐる



見田宙夢

涼しく歩こふといふ妻と子の月夜で

遠い山が浮いて日は落ちようとする

てこをはさめて石の穴を堀つてゐます

山へ道があるここに待つとしやう

月夜の虹のやるせない遠くの海の音

三田翠山

理工科を出た仕事はない

二人のベンチの月はあかるい

初恋は失業して今朝轉地した

乗つても乗らんでも電車を運轉してる

誰もゐない花一枝貰つていかふ

福山溪水

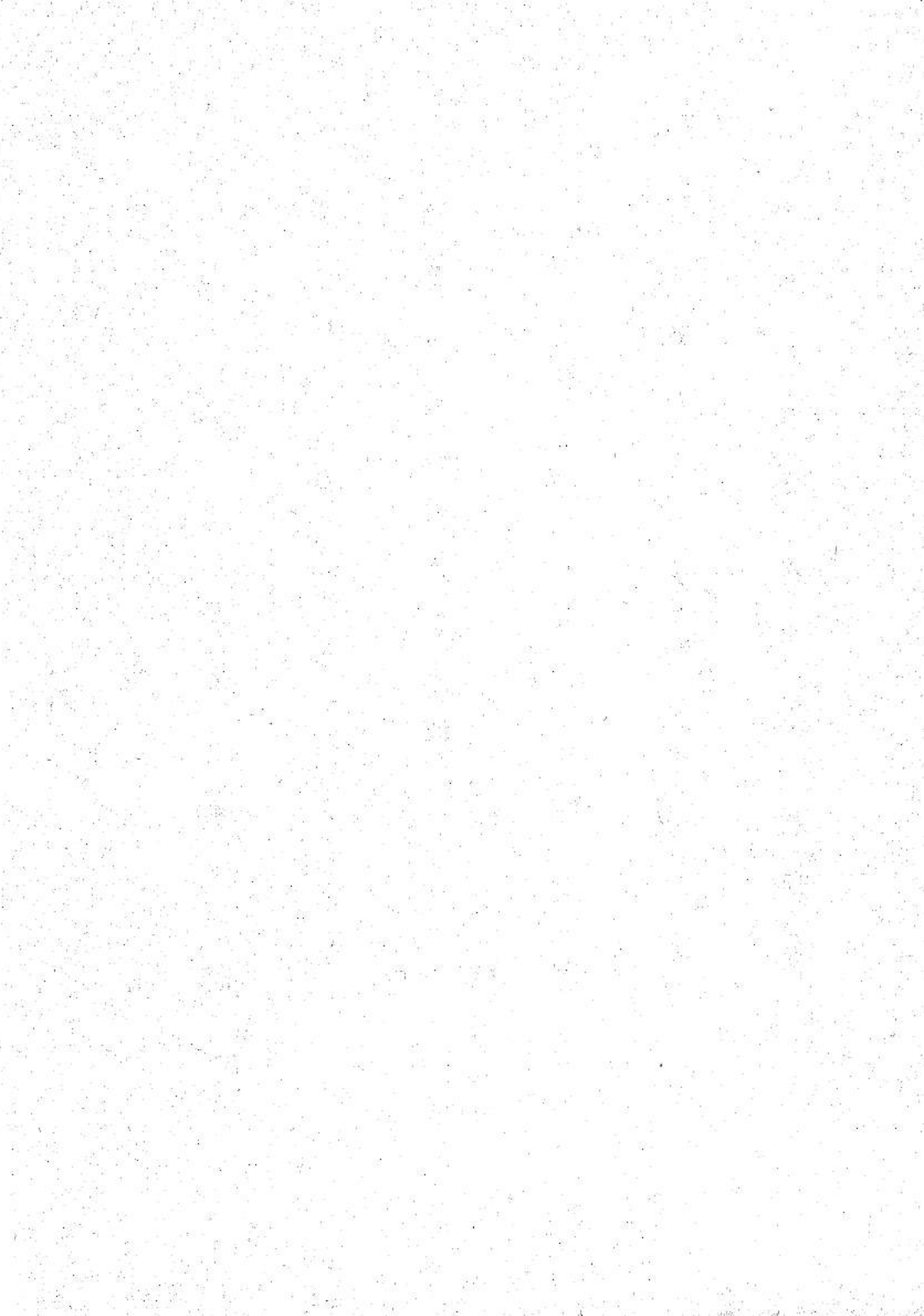
訪へば子が留守居して玩具見せる

浪乗り時雨たりする遙か谷の虹

松本青味

既に明けてる雨の衣服をつけ

夏雲へ飛込んだ水の肌觸り



炬

火

宮  
城  
與  
德









本 目

渡松若 有西谷白安加鹽中  
邊尾林 澤村口石齋藤谷塚海  
嫁 木 花櫻 一  
ヶ 藤乙染 絶喜 馭塊 雪 鶉 碧 紅  
君明吉月頂作史子腸平樓 派

齋足山本木藤三枿相池吉  
藤達形多内田國屋澤田原  
露雨欽木柳紫烏秋華杜東  
葉滴三半陀橋星川芳子畝



東京 中塚 一碧樓

遙かにオリンピック競技を思ひ

鉢巻よ吉岡よ今トラツク爽やかに

南部朗かに飛べよわれらに日の光りあり

水泳いくたび日の丸をあげる水はひかるに

在米同人諸氏へ

木槿の花が咲いてる元氣に話さうよ

岐阜 鹽谷 鶉平

よべの夕立の田毎水つくものが田草をと

はじめて薄暑半杯の水飲み

藪表は花畑ヶ篠竹の子が竿立ち

眞竹の子四五本しばり提げ風呂敷にはせざり

あなたさまのやうなひるがほいちりん

書淫老生百足蟲を挟みすてつ

おもひたそがれ洲に月見草咲く

はだか安閑孤獨の茶を飲み

としよりにつらくとしより笑ひてひるねする

あさなき頃も暑かりきけふの長良川祭

青胡瓜茄子なんか安値で唐辛子トマト

暑中御伺

さるすべりが咲きますとハガキかきはじめ

遠江加藤雪腸

眞夏七章

子に座禪して見せる耳のべ一つ蚊が来て

眞夏この高き屋に登る高きはものの涼しくて

大樹伐るものよこの炎天に斧を打ち振り

夏月へ家の骨組みがある白い

袖し觸れても散りまろぶ鳳仙花あどけなさに  
木かげ涼しきは毛を梳かせつゝ目を細うしてゐる馬

川は日中遠風げる一二艘穴釣小船舳高かに

宮城 安齋櫻塊子

滿樹山房近詠

雷後雲の荒涼笠を脱ぎ蓑をぬぐかな  
そぼ降り山の蒼む暮むへ鳴ける

わがこの夜の鋭心灯に落つ斑猫のきんいろ

雨夜の思ふ蚊張ありて眠るであらう奥山人も

西はまだ月の夜草を刈るかな

伊豫 白石花馭史

家のむかふの船の帆柱はけさ家を出る時旗もなし

庭には日向葵があり花にむかひ朝めざめてゐるし



夏がつゞくと見し家にタベタベの草の茂り

今年梅雨は来ない彼は庭の苺を取つて食べてゐるのであつた

これら青い葉をつけ百合の小生えが立つ

庭にくちなしの花咲いてゐたずつと暑い日が来た

代のもとの溝に生えてゐる雑草はこれから夏をひかへる

静物油繪などもかかるこの友達の部屋に居れば薄暑けふのごと

ことしつゆの雨はしげく檜の木にふり込んでゐるその方むいて私達をる

東京谷口喜作

雲脚迅い少し雲切れのした青い空

夏草よことしも氣ままなる旅に出でし

信濃より柿あくり來しもみがらにうまりて來し

越後西村絶頂

はる早い枝から地に下りてことり

北海道定山溪にて

一羽か山の鳥鳴き白樺林夏深かまりぬ

鳥のこ小菊赤きは咲き

野鴨ひくう飛びさりしあとに残りたる水鳥

大阪有澤木染月

蛙子地を飛んで大悲日蓮菩薩

手をのべて取ろう桃は葉かげに赤くなりたり

葡萄棚のあの青い實は透かして見るとまた青いです

白湯を飲み白湯を飲み日中松と百日紅

庭の苔青く仔猫が踏んで出てくる

河岸の家はざくろ花咲いて暑き日河の水  
みちをあるいて行く山べ暑き日の漆の木

近江若林乙吉

家鴨岸に眠つてゐるあの長い嘴僕見ずに通れない

麓の家に半日ゐて山風吹くからでなく

桐の青葉そよぐしばし木蔭したしみて通り

塀さわのうぜんかづらが咲き手拭下げて僕見て通る

山水草原に落ちるこれから谷水呑むでゆかう

蕪の安値このやうな夕べの汁鍋をかこみ

しらさめこの杉の樹下にももり又いつ時は降らう

ちまたの男女男はいづかたも皆藁帽をきて

見れば鯉の腹光りダンベの一二尾を掬ひ

我庭の松みどり日没あすはお天氣

東京松尾 轟明

椎の茂み月の出となるつめたい飲水をのみ

このまゝ暮らそう廊下に立てば冷ゆる木の空

延べむしろによりつどふ家のも蚊遣焚きつくして丁ひ

晴天つゞき木の葉のそよぐ雑木の山の雑木帯

土曜の空雲の峰立ち私立ち

木々の茂りとつくに鉢入れなければ庭がみつともない

星のまばら山の家にも山のみえつゝ

梅雨晨朝餉を終へてあこ家を出づかな

夏朝山星は消へさり

汗しらずをふる湯衣の襟をくずしてかあさん



木の葉よ晴るる母よ埋めよ埋み火  
あこ病むあさの木々の美しさ薬を買ふ

下總 渡部 嫁ケ 君

夏山の水ひろがるところ雲わきのぼるかな  
汗吾が肌こはく吾が肌やはくして

秋田 池田 亞杜子

あついで日なかのコンクリートのほひにゐやう

秋田 吉原 東 畝

男に地かわき合歡の葉がとびてねむの木

秋田 相澤 華 芳

川舟あれにふな人に暑き日くれてゆく川の面

秋田 栴 屋 秋 川

あざみぎざぎざ梅雨ぐらいほんとうに青い

秋田 三 國 屋 烏 星

水面べたべた水草葉をうかべだまつて行かう

秋田 藤 田 紫 橋

豆の花夜にしろき家のべ家のあかり

秋田 木内 柳 陀

水 鐵 砲 空 に む け

秋田 本多 木 半

女 部 屋 の 眞 申 に 額 の 汗

秋田 山形 谷 欽 三

しろき他人のやせた身のしろければ夕べははや

秋田 足達 雨滴

芒あをうまだぬくい風が地をよぎらう

秋田 齋藤 落葉

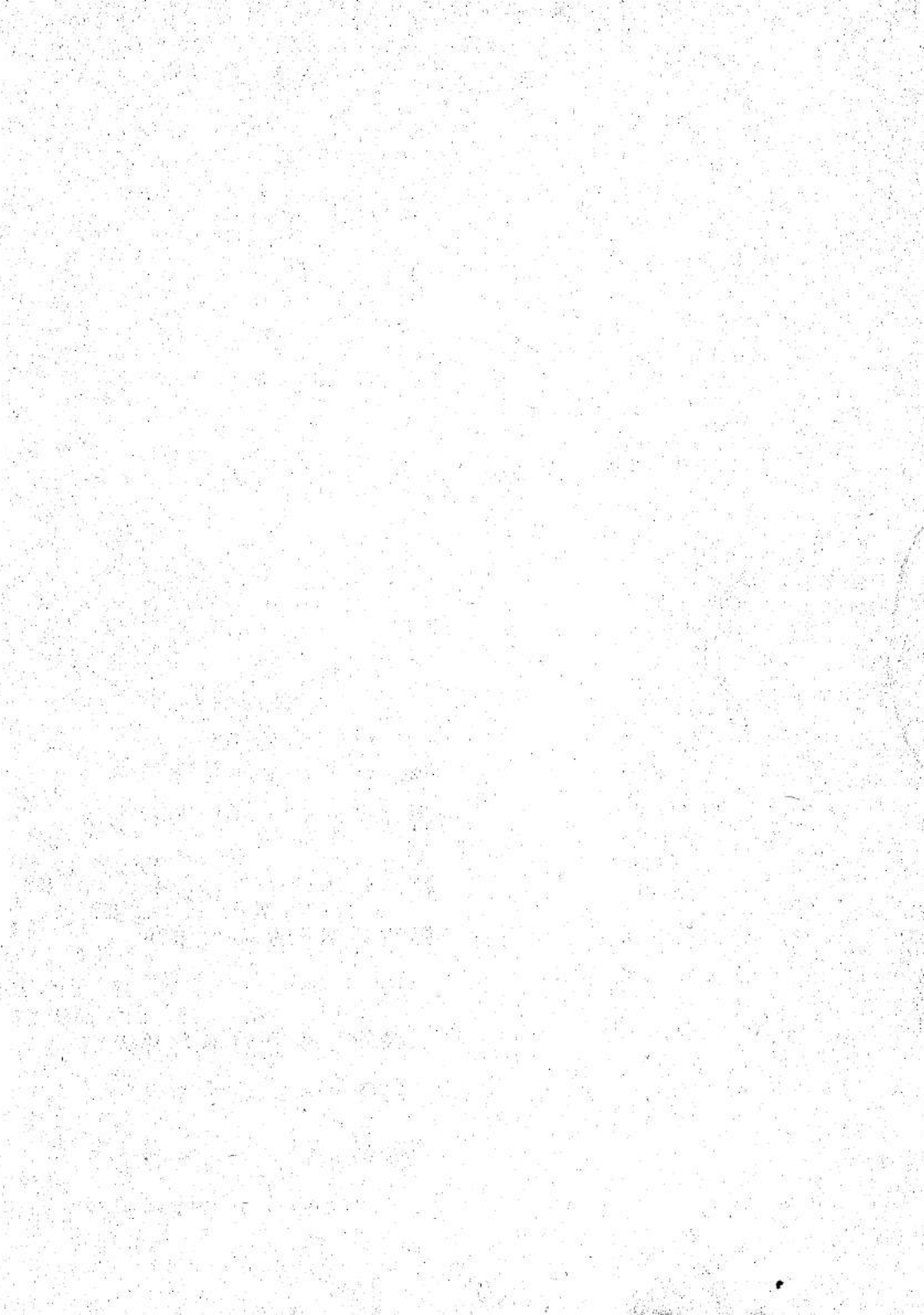
藤棚歪んだり藤の葉茂つたり寝てゐればいいのだ黙つて



本 日

海大河北久木酒種青秋荻  
藤橋本島保村井田木山原 層  
抱蓮綠北白綠醉頭君紅泉 雲  
壺子石朗船平樓火樓蓼水 派

塚知吉吉青伊藤近井大  
田覽澤澤山藤澤藤手越  
紅啓都稻郊雪、益逸亦  
子二美市汀男人雄郎紅





鎌倉 萩原井泉水

炎天海に風立つアメリカからのラヂオ聞いている

東京 秋山秋紅蓼

銀座の月

涼しくはだへにつけてゐるものが銀座の月

かぜの涼しく待てば来る

ちらちらと涼しい顔が花氷のやうな女

街のこゝから柳かぜのたち夜更け

月夜から散水自動車が出て来る

すゞしく行けば流れて来る星

葉の中鳴いて蟲のゐるかぜたち

風の出た青い葉にばかり残る陽

夏の青空が窓の四角に暮れ残つてゐる

すゞしく汗を拭きこんな青い窓だ

大阪青木此君樓

あついで旅して暮れ間近になつてゐる

夕やけて昏れてゐく海をこの宿

朝の涼しい一時を會ふて別かれる

わたしに食べさせやう冷してあつた

山口種田山頭火

旅のこゝも落ちついてくる天の川まうへ

何んと涼しい南無大師遍照金剛

水底の雲から釣りあげた

私の食卓夏草と梅干と

のびのびてくさのつゆ

つゆけくもせみのぬけがらや

京都酒井仙醉樓

すゞしさを夜の米とぐ

旅の祭の上は月夜

蛙わたしは灯して二階にゐる

腰かけてて鳥のゆく雲

草の花つかひにあるく

松も水にうつる花さかり

うららかな道のこどもをよこす

抱いてあらしの火鉢一つ

福岡 木村 緑 平

螢とぶ砂に着物ぬいてある

月がよかばの橋の葦の葉  
うしろから月が出て戻る

山口久保白船

居れば蚊帳へ雨ふる垣の朝顔

留守のくもりはれた風ある蜻蛉

散りて櫻もみぢのひと葉ふた葉はある門ぬち

あさ風のささの葉は濡れて道の石も  
夜の垣がぬれてまがつてゐて鈴蟲なく

京都 内島 北朗

道いくつでもある松原の浪の音

沖のくもるブランコに又子供来た

椅子に居て海の皆な鯉ぶね



浪の音花火が浪にちるばかり  
宿につく水平線の椅子が一脚  
砂の中筆草よつばめすいすい

鳥取河本縁石

夏祭りの花火が絹雲の月夜  
水田くれてしまへば遠いなづま

蛙に涼しくともしみんな裸のチャブ臺

ほのほ炎天の空へたけりきゆる

あぢさい朝かげの牛が草食む音

名古屋 大橋 蓮子

灯の下一枚の葉を喰むけもの四五匹で

鼻なくラヂオも風も來る机の電気スタンド

子供のねがほに月さし少し風ある蚊帳の内  
柿の葉に窓あけて朝々ながしもと  
すなほに粉薬飲んで宿題をまくらべ  
帯を三つ廻わしても長い夏やせてゐる

仙臺 海 藤 抱 壺

七夕の夜の葉の裏かへしてゐるぐみの葉

夕月 體溫表の山はなだらか

乳房 だけが あばあさん

獨り紅茶を入れて 離れの栗の花

指を立てれば すなはち止るとんぼ

水彩畫の やうな 桃手にとる

落花傘の やうに 蜂が來たりする シヤポテン

秋田 大越 吾亦紅

むらの一人の死んだしらせの風の中

二日三日は泊り室の外つつかけ

松がゆさゆさ風あるに朝の門でた

臺灣 井手 逸郎

澎湖島

防風の石垣をつんで黄槿の花

觀音亭

觀連世法雲三千雀のなく廚子

千人塚

灼けるやうな貝がら道の天人菊

拱辰門

木かけをたちいでて城門に月さし

承順門

月を觀る風おとする高樓

長崎近藤益雄

離島風物

牛のくそからキノコひよいひよい雨はれた

今年の柿の花はこゝで掃いて波音

生簀の魚の泳ぐさまの朝明けてくる

蜀葵咲く分教場で奥さんでお洗濯

夕明りの鳥がそこにも浮いてゐる黍の花

裸に蟬のしようべんの夏休みとなつた

夕あかりのアメンボの洗濯石がぬれてゐた

海水帽ほして夕空へ出てくる雲

秋田 藤澤せい人

夕べの瀬音は汽車が鐵橋を渡つてしまつた

つめをつんでしまつた雨をみてゐた

ラヂオがしゃべつてゐる夜のアイスクリームの匙



鎌倉伊藤雪男

すだれさげて日曜のしろい蝶が畑中

梅雨があけたカンカン帽で南瓜の花

日傘すずしい松の木

夏の夜の星も灯し涼しくてゐる

暗いとなりの家根から煙火があがつた

北海道 青山 郊 汀

アカシヤ 薊れば 蜂の 巢は 蜂を 盛り

大きな 翅のごと 夜は 一枚の 芭蕉の 葉です

やや 酔心地の 松風へ 提灯む けてゐた

翹するは 星夜の 木がくれの 門燈です

夜の しほざえを 暗きに すだく 鈴蟲

そよそよひるねの夢へ人聲のもれきて

なみぎえの木の葉のそこ暗い風だ

遠くひくひく近くかなかな波音の夕べ

木の葉一つ夏がれの芝に落つかなかな

朝鮮 吉澤 稻市

水へ青い實かぢつて捨ててある

石垣の間に草が出て其の草は黄

晴れ上つて肌へに空がふれてゐる

朝鮮 吉澤 小都美

なつめつぶらになり朝など葉を落す

朝鮮 知 覽 啓 二

ラヂオ聴いてゐる窓の朝ぞ

滿洲塚 田 虹 子

ぶたを追ふて行く支那人にとろとろとある夕陽

ふきの匂ひにも古里の戀しいふきの皮むく

アカシヤの花も咲いて裏口から賣りに來たロシヤパン屋

ゆたかに芽ぶいて冬からの小鳥の巢がある

月が割れてると子がいふ滿洲の片われ月で

父母を旅におくりてより畑のあちこちと青むや

さびしきは云はず髪とく窓に松の花

ふきのとうも出て来て男山羊はいつも柵の中

胎動を感じ春の夜のかへりあそき人を待つ

並木芽ぶきたれば出てゐる風船賣

芽ぶいて咲いて思ひ出してもしやうのないことばかり

太陽に祈る者

上山平八







Ed. Mt.  
193



同人自選句抄

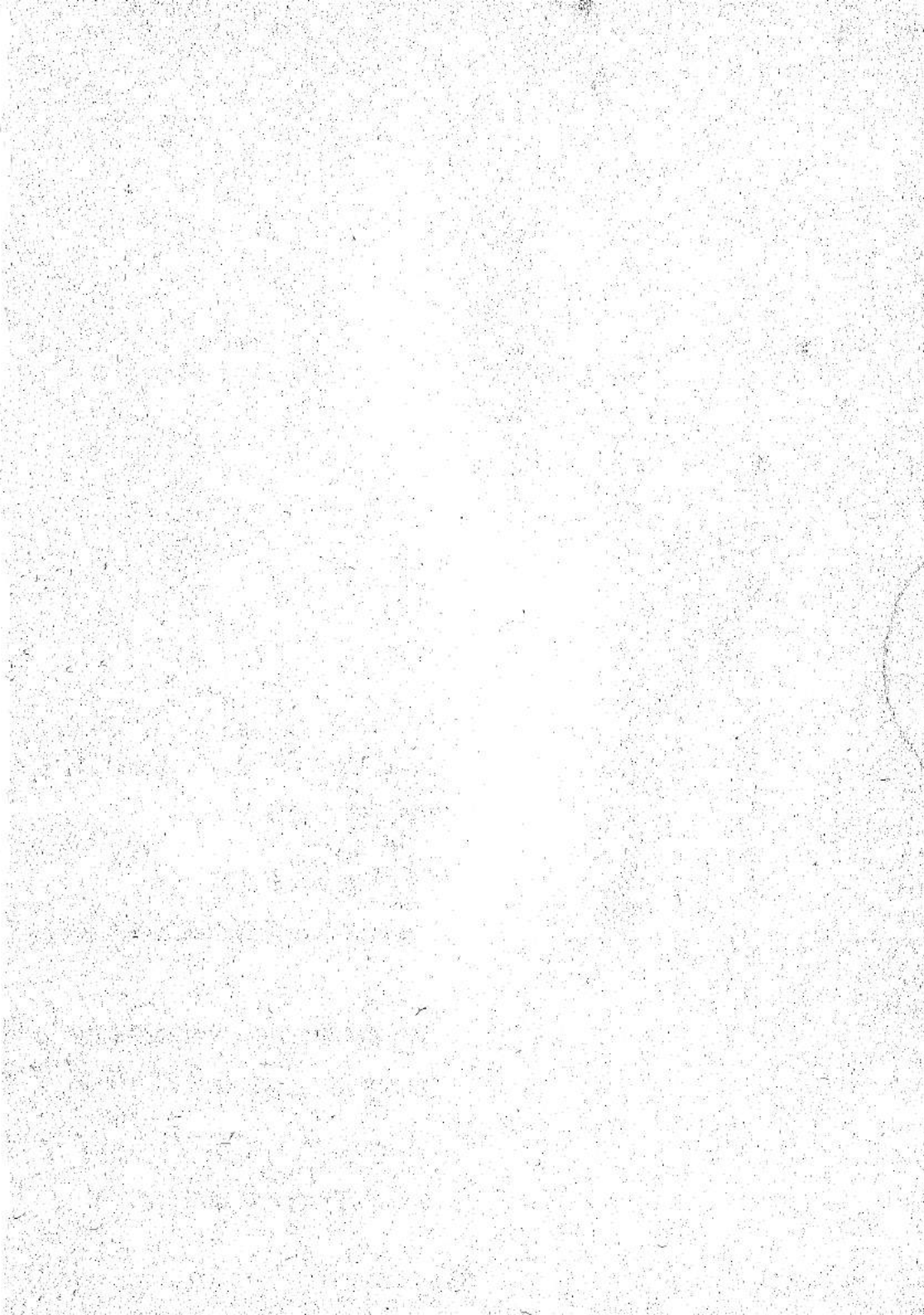


人 同

---

半三佐田片高奧唐關鈴佐佐德岡岡  
田好 村井山野津谷木藤藤永 村  
瀬 溪 田草 胖  
節峯 杜巖泥青文蓬荷一知芥 子  
遊人嘆女子草珊夫朗聲水星子志鳥

古下藤永井佐山三林水羽櫛築山  
田島野原上木口輪田戶田山瀬野  
純花英秀靄黃精古盛愛馬四葉重  
瓦  
三魁三秋女洞子紋雄川門門子志



林檎の花

岡村 眸子鳥

月夜のまるい芒の穂ばかり並んで

夜るの水冷めたさうまさとなる

夜雨に濡れて來なさる子もついて來る

陽がまわり親らしく子らしく饒舌る

しけぶり濡れ戸を暮らし降りてゆく

先生に連れられて白い雲と鳶と

淡暗い雞小屋で子を叱つてゐる

少し熱ありて畠の柿の熟れたる

二番目を抱いて出る落ちてても落ちてても花桐

弱い陽が落ち小寒いさつゝさ



淡い陽脚にあとよい遊んで歸る

ちぎれ雲高く秋の屋根とがり

破れ凧の山の兒等あそびくらし

沼のかわづ咽喉ならす曲つた夜道

汽車を見てゐる小供の寒いパンツ

野菊が咲いて坂を越す此處も晴れ

空が晴れて歌を唄へば哀しくもなり

も少しは降りさうな風吹いて暮れる

舟が繫がれ毎日繫がれ水の汚れたる

林檎の花白くあすのくらしへ咲く

へちまの種

岡草志

へちまの種の袋の上にへちまの種と書く

紙袋の底から松茸をつまみだす土がこぼれ

男ばかり棲んで男のにほひする秋宵の男ら

酒男が蚊をたたきたる濡手大きく灯影す

厨 たるが るる 水底の 豆腐

懐 舊

灯し更けて松蟲のひげながくうごき

材木船がはいつてくる傾いてくる夕汐

二年目の茄子がなりつくしたる茄子の木

バサデナの山が近く見え裏屋根の霜

二番目の小僧が歸り來る秋夜の口笛

秋風ほこりして支那町の口あいた商人  
赤ランタンが秋めいて地ならしがしてある

踊りかたぶけし月がきいろい泥家

斜かひにみちづけし空ロットへ小學生徒ら

空ら函をけつて見てつゆけし

ひる菰粥をすすりだまつて箸おく

をんどりふん反つて鳴く午近か

毛深い脚で大さう葡萄を踏みこんでる

めらくと燃えたあとがくすぶつてゐる

あほしけのあとの妻子に見かへる

故郷

徳永田 芥子

ふるさとの河原蓬の吹かれてゐる

夜の灯に蟲のくるはらからと座る

手向けの花わける皆佛となつてゐる

幾歳月を國訛りもでゝ桐火鉢

淋しきは晝の御寺の山茶花  
山近き墓地の鴨のきて啼く

思出の山は煙る櫛紅葉

吾家

波止場出迎ひの旗ふる蜻蛉飛んでゐる

旅果てし吾家の庭掃かれ菊も咲いてゐる

秋草一つ二つをさしやさしくもある妻



鎌倉にて(二句)

宿の八つ手の大きく又浪音のつゞく枕べ

夕映える紅葉観音さまを二人で拜むだ

吾家の屋根の雨音さひて炬燵

二月淡雪夜の街に出でし靴をぬぐ

武藏野住めば家近くなく鶯

雨の日の妻と隣りの櫻見てゐる

今日も午後祭りの太鼓きこゆる山吹の散る

寐起きの二階朝な見る藤の花の薄むらさき

朝な髪結ふ妻の影うつす四月となる

旅の支度の葉櫻となつた彼岸櫻

野火

佐藤知星

山里たそがれてゆく水音ちかし

足並みだるゝ吾らに暮れのこる山

小鳥ら真下に囀る谷の水音

秋の道日盛り豆殻のはぢける音

兩日のつゞき厩の馬のふとり

暖冬のポーチにさゞやく老への隣り同志

並木の紅み朝々の霧しづく

半追ひ下ろす山の頂きの夕陽

朝さむの霧笛につつまれてゆく勤め人

別れて歸る川づらの寒さよ漣よ

女よシヨウキンド姿見にする若さもち

ふる里はあやめ咲くとて父も母も佛さま

淋しい小石蹴つてゆくうしろ姿

うらゝ野のまる寝に草の實のはちける音

山のでつぺんに立つ人見上げて小さし

手づまる碁の温もりし一石をうつ

笛の音が秋夜の湖水にたゞよふ

獨り言云ふてマ、ごとしてる山の子供

野火がはつきりしだした暮の空

雨よ降れ眞夏の山にふれ

ポインセテヤ

佐藤 一水

ポインセテヤ散り散りつくし雨となる

山は眞白花店の明るさにゐる

ストーヴ焚く朝のサイクラメンがこぼれる

ウイルソン登山(二句)

どこまでも爪さき上り石ころ道はやも雲は足もと

のぼりきてむさぼり飲む岩清水二月晴れ

春が地べたでほうけた蒲公英公

からし菜がほうけた陽だまりの手まくら

わが口笛に星がふる石ころ道

鳥屋の雨もりに小鳩の目がことさら可愛い朝

潦雲の深さにくるま乗り入れる



帝國平原にて(三句)

たかる夏蟲にカンテラもかすむまま寝入る  
けふも炎天が日の出前の瓜を割る  
いちごも熟れた山火事日和  
ぽっかり出た砂漠の満月  
乏しいくらしの箸を置く満月です  
朝顔がちつちやく咲く秋晴れ

出帆所見

なげてもなげても風に切られるテープで女は泣いてる

働さに出る戸締りにひとりを感じず

かくれ住むふたりにくる女もない明けくれ

夕かぜひいびいとなりし此のごろの郷愁

地に呼びかける

鈴木 荷 聲

地に呼びかける聲のあつて萌ゆるよ

ひまはりまはり切つてポーチの黒い顔々

金魚生みさかり池水ぬくみ來る

女よかしましい冬枯れのこだま

夕陽大きく沈み行く江塵

景氣が動くらしいツイン樽が運ばれる

叱つても叱つても辨當に砂を舞はせる

暑ければ暑いで賣れない今年のフルーツ

北風に灌水する農夫らやせてる

たんぼ、地にへたばり春は未だし

影膳をすへて貰つた母はなくて母の日

植えかへる根からほうけ立つ地いき

思ひ重ねる膝が冷え切つてしまつた

法の手が届かぬ木蓮に觸れて見る

生け芋の蔓が陽脚を探ぐり延びるよ

入陽の屋根が重なり合つた影の濃淡

乳吸ふ口にこもる精一杯の命

茄子の花がばた／＼落ち明るい地づら

サイレン響くあの街この街小暗く

生きねばならぬ金策つきた夜の深み

吾等の足跡

關谷蓬朗

また逢ふて握手するアモンズの花

日曜の床に朝日を入れて親と子

芽ふく接木の被ひをとる朝晴れ

夜を歩いて考へ事も朧月夜であつた

羅府五十三年目の初雪

窓から雪の立木が見えて目ざめてゐる  
なみくと湯糟が満たされ夜の放送がある  
貧しく見の髪がのびる五月雨だれ  
二つ三つたゝいて見る初なりの西瓜  
雨の賣上げ少なく寒むい灯  
そとは雨音で湯上りの爪を切る



日くるゝ雨となり酔うてゐる

月の夜の木の葉は光りて晝のぬくもりがまだある

焚火にウエニーを焼く皆んなの手がある

海まで刈られて入陽にをる

そとは澄み切つた星空で日本のラヂオが聞える

ながい頼母子講も終つて澁茶をすすめる

低加洲メキシコ(三句)

夕べの木影に赤道の濱風をうけて土人の管絃

こゝにも同胞の足跡がある土人オンボレの鞋ワラシメ

濱邊は椰子のみどりにすわる

オリンピックの跡

烽火は消え塔は高く月夜の空

マグノリヤの花

唐津文夫

うすら日の八ッ手は咲いてこぼれてる

仕事がない影法師先に立てゝ戻る

ひえびえ暮るゝ青空に豆腐を切る

永い日向き合つて挽いてゐる

月の梨の花は青白くて遠いクラリネット

ピスモ海濱

旅は自動車からメリゴランドのヨットが走る

モントレイ、小谷居

磯打つ音の日本風呂から出て流れてゐる天の河

フレスノ、中島居

話しが續く葡萄畑へ月も落ちて了つた

キヤタリナ島行

飛魚が飛魚が舳にネクタイをふかす

菊の蕾がほぐれる朝からの遊覧飛行機

雪解けの兒の手を引きいくつもある廣告氣球

どの枝も枯れきつてゐる鏡屋の鏡

つゝましく暮らし莓は花もつ

ぴちやぴちや雨から釣つて來た

バラシウトまひるの床屋さんも出てゐる

蔓も夏めく風の雪の下の花

もう來そうなもの月をどんだん雲が通る

霧の マグノリヤの花の開きたる

オリンピックもすんで了つた口あいてゐる庭の無花果

日本勝てえの風船も揚がつた空で

素直な心

奥野青珊

小鳥も世辭たつぷりの花の中

も皿ひかれずゐて春宵のあくび

旅から歸ればストロハットの町となりゐる

西瓜抱きあげて母を覗く満面の力

吟行句

どの草もひよろ／＼伸びつくし谷底

野營句

谷底のテントからあの星この星

だるさを寢巻のまゝの夏朝

お錢ぜが聞える町中の暮し

お國訛りで芥焼いてる隣のおかみさん

落葉かき集め素直な心



馬は霧を吐き霧を分け土塊  
手傳はれ散され笑つてる日曜の種蒔き

紅茶勸め寄る圓い肩の秋夜

漬物切る音のことさらなる夜更

雨に車窓の閉された別れ

靴紐は黙つて切れた

扇子を擴げて眺めてる在米二十年

月も入れて秋夜の日本風呂

急げどちらほらアモンズの花

今朝は子の手の冷たさまん丸るさ

柘榴紅

高山泥草

ほぐしやる柘榴吾子がたなそこの二三粒のくれない

柘榴に唇も染めて子のよく獨遊びすよ

子が掌にほぐしやる柘榴ほろく母の戀しく

柘榴口あけきつて秋もも中の光り

池水の底邊ゆるゝは魚影秋づき

庭木々の間うつろにまこと秋空よ薪曳きして

枇杷の花わづかふゝみ冬着を乾す

やがて咲かむ鉢菊も引越の荷屑

釣舟動かぬいく日の秋風

ゼレニアムすがれ濱町は空家ばかり

薯烟枯れその蒼空の日つゞき

蔓薯さげ母のあとから子も来る

秋の雲低くもあへたるまゝの貸舟

庭師の今日も来て缺ならずにあきつ往きかへ

アメリカのどんぼ大きく見てゐるはわたくし

玩具投げ出し寝てしまつたこの子のクリスマスエブ

お祖母ちゃんからのクリスマスプレゼントです枕許の靴下と靴など

貰の火なんぞわけて仕事も無い埠頭のひとむれ

日本の船が来た酒飲みに行かうよ

山々大きく春の雲ゐる

真晝ひつそりこの峰あの溪囀りかはし

果物店つやく秋の灯をひろげ

波の横顔

片井溪巖子

友より離るる日々のこころ

菜の花つづく雨の道標

脊中を叩いてる牛のしつぽ

ポプラの揺らぎたえたる空間

不自由しな  
い暮らし

雀鳴きや  
まず胡椒樹  
の一日

もどかし  
い時計と  
俟つ

柘榴くち  
あけ隣りは  
メキの子  
澤山

キャン  
プの風車  
廻りつめ  
て新月

喰べる  
しかない  
杵に長い  
綿袋



何氣なく落葉の街頭ゆく  
人の仕事をみてゐる失業

葡萄酒の味云ふてあるじの自慢

室内へ挿した竹の氣品

一寸來て拜む佛の灯

だまつて働くより外ない

秋をうつして波の横顔

逢ふて別れてゆく人許り

冬の陽あつる向ふの平原

たべられない人間が殖えてく

掌の砂

田村杜女

麥の穂光る午後の山並み

風車まわらず山が根の初夏

萩原公園にて(三句)

竹垣にそうて旅の水音をさく

つるべ滴たるみづあとに風ある楓

椽臺のたびの勞れにあつる木の實

楮子へな　く　街燈みがいてゐる

風にまゐるまつてあがつてくる夕刊賣りの聲

霧は街の傾斜へながるる青月

湯はたぎる秋夜の雜念

よか夜カーテンのゆらぎゐる病み心地

苦難の日々を心にたくす

道義だなんてこんなにしてあ

まづしく出て行く角のポスト

生業のソロバン持つてもはじけぬ宿命で

どうにもならない感情

みたすものが無い青空

オレンヂの花雫するキサラギの旅

夜ごとと蟲鳴いてゆく春

にぎつた砂が生きてる掌

地の果てへひとりゆくもの

砂漠の一點

佐瀬

曉

違つた國語に同じ感興を見出した燈火

努力も空し稔りしままの畑に月澄む

小春晴れ山脈の遠きは淡く

異人種と遊ぶ兒の時折は日本語で

この砂漠の一點を青くした悦び  
馬の池にも水満して月夜

國境の禿山消して砂風

日本人は日本の草花咲かせて

湖なりに沿ふて汽車と國道

蟲時雨のランプを置き代へる



不甲斐ない命に鞭うつ夜長

吾兒へ約束の雛が買へない春だつた

口ほどには動かぬ手で親に指圖してゐる

春の砂漠の夕陽は子供の繪に似て

兒が風をあきらめて戻る桃の花

春の山越えて来て此處にも人里

雲雀打ち止めた野を見下ろす崖で

月が枝にしがみついでる風の夜

古いフオードが躍つて行くよ菜の花

猫と紙袋を奪ひ合つてる春風

縦斷一萬哩

三好峯人

あけぼのの雲一筋高原の低い山

高原の曇りに初秋の風を孕みて草草

驛に着けばをちこち山づらの光り

夕陽の尊さにしみじみひたる山の連らなり

つかれて村に入るポプラのほこり  
夕日とけて我影淋し

家はや閉ざす女にから風が舞ひ

夜は小驛のとしびのまたたき

糠雨に今日も暮れて一樹の深さ

はるか街の灯の瞬き一樹の黒さ

明るく暮るる春空の廣さ  
一と組の雛にすこやかな家うち

彼女は旅立つ(五句)

出船に鷗もせわしく飛び交ひ

秋風ぎ巨船ゆるやかに岩壁をはなれたる

力の限りあぐる聲聲とりどりのテープ流れ

淋しき心を寄す此の犬の伏せる姿に

朝曇りをなごやかに瓢たれ重み

六月の川底

半田節遊

水着規則のゆるんだ濱濱の人出

山山ほのぼのと明け麓の朝煙り

ユカほうけて明方の山の匂ひ

浮草が根づく六月の川底

ギタ<sup>ラ</sup>を止めてサイコロふつてる棕櫚蔭

隣りのセニヨリタ十八夜毎窓下の口笛

もう麻雀の話をなさうな夜となつた秋



水瓜の種

山野重志

いさかひて見る月なりみみずなく

机を飾りぢつとしてゐる夜なり

秋晴れの大道を塞いで牧牛の群

二日酔いの瞳に泌み楠の葉光り

病み疲かれて水瓜の種子を數へてる

木莓捧げし指の白さよ小雨に滯れて

ペランダ

水戸 愛川

夕涼みをペランダに語ろう女の素足

高臺にそこら家ある林檎色づき

紅白のテープ

築瀬紫葉子

一日の勞苦を贖ふ夕餉の酌

紅白のテープの中からうるむ笑顔

配膳の合間縫ふ愛嬌のこぼるる

オレンヂの色

櫛山四門

水仙一つ花を持ち朝日

オレンヂ一つ一つの朝日の映え

病妻と居てストロブ見まもる

衰への妻よこの夜風吹くな

朝の顔を合せて妻と寒き陽にゐる

白砂にたわむる

羽田馬門

腰かけてゐるストリートに春暮れてゐる

憂なきや娘等白砂にたわむるる

秋立つやルンペンの宿替へをする

蟲啼いてゐる靴ぬぎすてん

オリピックも歴史となつて了つた綠草にすわる



灯の街

林田盛雄

灯の街の橋に佇む

蜘蛛の絲に宵の疲れし腫を投げる

椰子蔭の辨當を擴げた微風

新緑に走り廻はる兒のあとについてる

靴はぬいで木蔭の晝蟲に寝る

みんな黙つてゐる葡萄棚の宵風

トンネルを抜け又トンネルの旅つかれ

風にとられし帽子みてる

花  
苗

三輪古絃

春の陽がさすカン／＼鐵打つ

旅の車に花苗が萎れてゐる

俺たちの船が沖で灯をつけてる

雨あがる假りの溜りの漣にして

生活の舟をあがる者の春夜

アペマリア

山口 精子

聖マタイのアペマリアの鐘がなまめくたそがれ

なんにも祈ることがないのる

# 行人

佐々木黄互洞

見覺えの人の名思ふて通り過ぐ  
商人らしい牧師が街を説いて行く

長 髪

井 上 靄 女

イトスターリリーの一つ咲き二つ咲きかりそめの風邪に

わがをとめの長髪を感じ初夏の野に

春の念佛

永原秀秋

白壁ならんで落日の二人

日まはりの下をくぐる赫土の肉感

野分するひるまひなかの小猫

芽吹樹並び今宵も一人か



いざなはるる不良の夜を重ね浅春

妹よ！季節の風が吹いて兄は歸りたい

あかぬけのしたいと子だなア春の念佛

酔ひざめをてくり雨となる

べらぼうの感傷に一夜ごしの自分を考へる

無明の子は眞夏夜空に母の名呼ばばや

斑霧

藤野英三

みだしたまゝの室に暮れる暑さを出てゆく

靄こめし海角めぐる耳近き波音

星流るる夜踊りの足をつらね

帝國平原所感

畑ふかき家をめぐる水音明るし

おん身ひとりと思ふままの夜遊び  
川を境へる二人に街の燈開く  
斑霧に遊びの友だちをつくる  
狭霧るころを訪れてくる  
燈暈ける男きもふとくなる  
霧ふかくとざして這入る

西瓜の種

下島花魁

西瓜の種を吐き出したる手を重ねたる

夏風邪に布團しめり親がなかつた

桐暗に夜ふかし男をかくす

汗臭い中の男わが男なる

布團から足出して動かしてみ春の夜だ

わが聲ふとく少女にたはむる言葉

霧夜の電燈の光に入る女の酔ひざま

吾が罪を責めて歩み行く闇夜の二つ灯

親族の誰れかれ水仙の花こち向いて開き

見送らるる戸口犬の毛くさく

くるみ

古田純三

芽ぶく無花果の家かりることにする

引き越しの一日を子の人形はなさず

くるみ地をうつ家のあけくれ

あの樹この樹落葉するまひる

山葡萄まだ青い山に別れる

霜の朝氷屋氷割るかけら

寂しさが豆つまんでる顔

水禽水にゐて夜の湖くらし

旅立つ曇天の蘭ランの花しろうこぼるる

仙臺にて

宮城夏の夜暑うさんさ時雨さえてる





草

萌

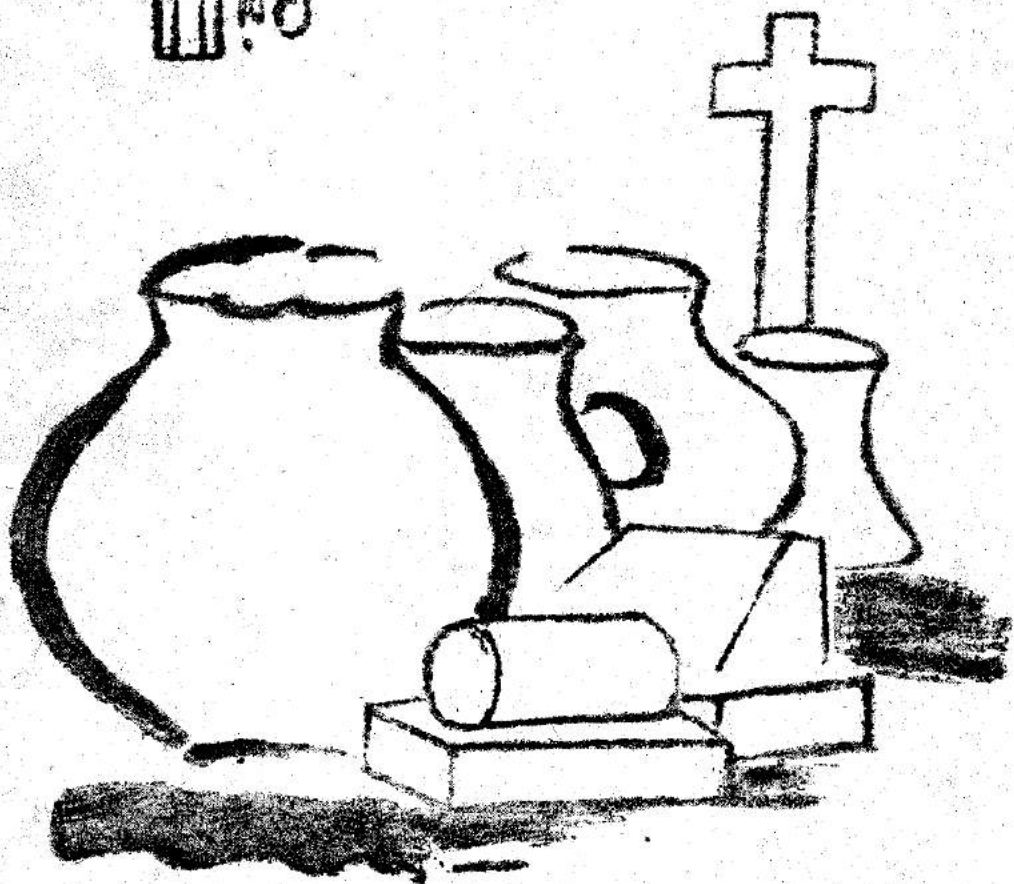
岡

草

志



子  
箱





直原とし平

菊つぼみまじかに秋のあしあと聞ゆ

さくあかりのひとよきのたそがれすぞす

もづだまりこどもがあらず

むねいたきあんずのはなありゆく

焚火の灰ひをふるにかりかえる

忘れ事覚えだす日傾く

ひばりの聲ランプ吹消す

春日の砂に心うずまりつくす

小鳥のつばさ花曇りもおもしろ

雲の峯わだかまる青空さけんとす

雲の峯ちり夜空ゆるみたり

西瓜の皮すて軒の日影立ち

陽白し我が悲しみの前にして

落葉に汽笛のねいとひく

カヨテなき犬なき冬の夜のにぎわし

蟲なくつめたき石により耳そばだつ

灯火消えし夜の底を風まろぶ

焚火の灰降りレモン静かし

雨の暗を出てまさわる妻子可愛し

草の日影曠野晝下る



加藤泰山兒

はるく歸り來し君が頬霧にぬれたり

別れしがやがて夜霧に消え行けり

秋の風絲のごと白く細し(此句故人の碑に入れる)

救世軍ひざまづき祈る夕陽の街

雨まつ人に風がざわく鳴つてゐる間

ひそくの話もる明け方の壁  
電話さりぬちのよく胸を壁にもたゝる

鉛筆屑燻ぶる午後三時

昇降機降りて秋風の街に出づ

公園のベンチに一人あり落葉舞ひ下る

戸を叩いていらへまつ胸のときめき

さ  
り  
げ  
な  
く  
君  
が  
手  
を  
握  
り  
別  
れ  
け  
る

黙  
つ  
て  
歩  
く  
肩  
を  
打  
つ  
落  
葉  
な  
る

久保綱子

日入る方より方よりと黄ばみ行くポプラ

秋雨の中をとぶ蝶淋し

千なりひさざいとほしく口づける

秋雨の夜夫と憂き語る

寂かに静かにガムの花散りし夕べ

誰とでも握手して見たさの此法説や

眼展けば誠に春の野なりけり

誠に春野あふるゝはよろづの悦び

幾度びめぐる春なれどよみがへる生命ぞ

春の喜び友が住む石野にも匂はんか

芝生の上の黒ン坊白ン坊それらとわが兒

我等の家の建てられもせぬ國に住み馴れ

飛行機傾しぐ秋空の晝月動かず

卷末に



▲此の句集はアゴスト社同人の句録として出版したい多年の宿望であつたものを、偶々一千九百卅二年夏季に於て當地で行はれたオリンピック大會の好機を捉え開催した沿岸俳句大會をも亦、記念すべく同時に纏めて印刷刊行したものである。

▲一千九百廿四年八月の或る日、當時海紅俳句を熱心に讀んでゐた同人、櫛山四門君と二人で思ひついたのがアゴスト社である。序だがアゴスト (AGOSTO) とは西班牙語の八月を意味する。墨西哥と國境を近くする當地では、凡て西班牙の風物に接する機會が多い。それに八月に創始した句會であるといふ様な極く平凡な一寸した考へから名付けたものである。或る場末にアメリカでは珍らしい線香の燻つてゐる御大師様があつた。日本の眞竹の小藪や枇杷の木が植えられた貧弱な御堂であつたが、兎に角そこで發芽したアゴストは丁度、今年で九年になる。其の間、多量に作句もされ同人の出入も可なり激しかつたが、四五名のもは今尙ほ止まつて、それに次から次と新人を加へて外國にあるものとしての異色ある作句に精進して居る。

▲其れにつけても一言して置きたいのは吾々新傾向俳人の先達の人々である。アゴストが創られる十年も前だらう今は物故した直原敏平氏が南キヤリホルニヤの一隅にレモン詩社と云ふ俳句會を起し當時の新人を悉く吸収してゐた。逝くなつた荒川吟波氏の脈を多分に延いてゐたもので、高橋靜波、加藤泰山兒、江川源吾、



久保綱子、此等物故した人々と今、サンフランシスコに在る下山逸蒼君とはアゴスト同人の先輩であり先導者であつたと言ひ得る。後日、北米俳史が編まれるの日あるとせば必ずや之等の人々は其の巻頭を飾られる人々に違ひない。従つて或る意味から言へば此句集だつて此等亡くなつた俳人諸氏の靈に捧げるものでもある。

▲沿岸俳句大會は八月六日夜七時より始めて翌朝五時に終つた。サンフランシスコ、フレズノ其他の地方から酷暑の中を多數出席して呉れて仲々の盛會であつた。日本各地、及び布哇からの送句は距離の關係で間にはなかつたが總數二百三十句の送句を得て彼の大會をして更に輝しいものとなつた。此等の送句は直ちに當地の新聞に掲載し更らためて今度此の句集に再録したものである。

▲装幀は當地の畫家、宮城與徳君が一切をして呉れた『句集の装幀が如何に困難なものかを實際に味つた』と君が言つた通り非常な骨折りをして貰つた。表紙の内側に入れた沿岸俳句大會の寄書も同君の趣好である。亦、内部に挿入した上山鳥城男、上山平八、岡草志三君のカットも一段に此の句集の値をして高からしめるに相違ない。特に扉に荻原井泉水氏の句を得たことは吾等の望外の喜びである。同人に代つて感謝します。

▲此句集は纏て第二、第三と編まれて行くことを豫期して居る。



昭和八年九月一日印刷  
昭和八年九月五日發行

—(非賣品)—

編輯  
行人兼

アゴスト社

233 E. FIRST ST.  
LOS ANGELES, CAL.

印刷所

三秀舍

東京市神田區美土代町二ノ一

月虹舎藏書

Printed in Japan

謹啓

北米ロスアンゼルス市のアゴスト社全人の御依頼により此の

句集「炬火」を御贈りいたします。

「炬火」に對する御批判なり御感想なりをアゴスト社直接な

り又小生宛御送り被下は幸甚の至りと存じます

八月二十六日

東京市板橋區小竹町

日本力行會内

古田 純三

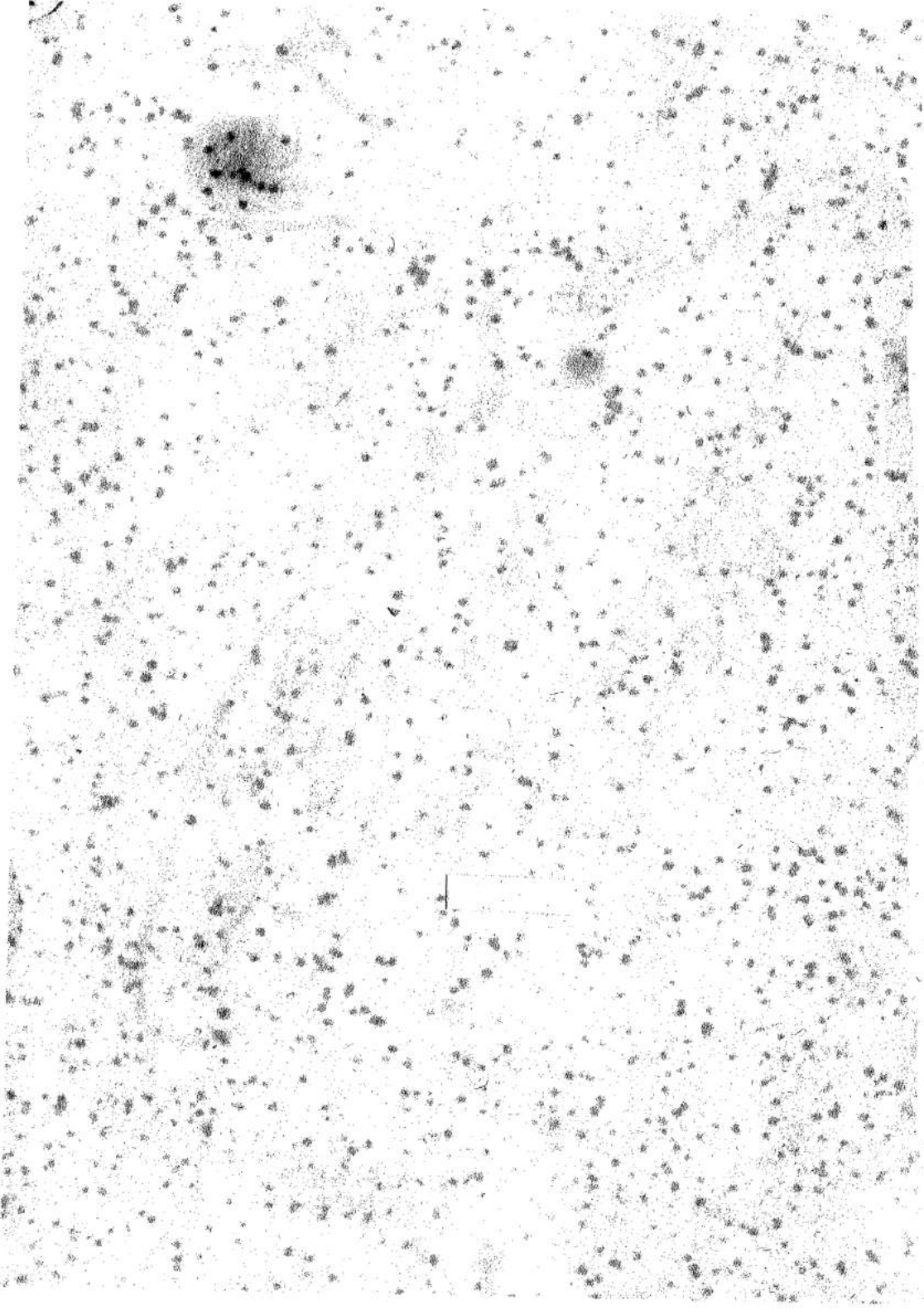
殿

アゴスト社 (代表唐津文夫氏) 宛名

Mr. F. Karatsu

1664 W-37 St.

Los Angeles, Cal U.S.A



知  
進

田  
本  
十

落

天竺の  
山燦子  
天竺の  
山燦子  
天竺の  
山燦子

唐律文夫

早  
子  
朝

天竺の  
山燦子

mpiad  
azetes  
1932



会

新



沿岸俳句大会

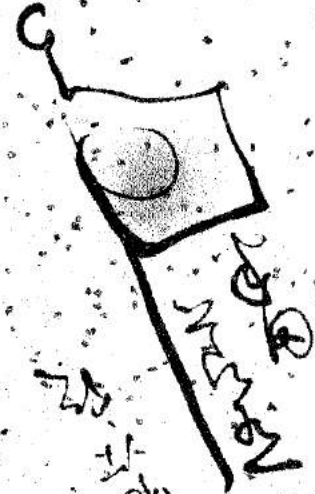
一九三三  
八六

玄心伝子

田林

野子身

三



玄心伝子

玄心伝子

玄心伝子

田林

田林

玄心伝子

玄心伝子



銅  
炬  
火